

岡山の民話に基づいた能・狂言の学習

山本 宏子 ・ 根岸 啓子* ・ 根岸 弘**

我が国の音楽文化を理解するために、どのような授業が望ましいであろうか。山本は、2004年から能笛演奏家の根岸啓子（博士・東京藝術大学、岡山大学非常勤講師）と教材開発の共同研究を行ってきた。根岸は、2008年から2010年まで、岡山大学短期留学プログラムEPOKの受講生を対象に能の授業をおこなった。山本と根岸は2006年に国際交流基金の助成を受け、アメリカのウイスコンシン大学やイリノイ大学、在シカゴ日本総領事館広報文化センターなどで、アメリカ人を対象に能のワークショップをおこなった。その後、学習院女子中・高等科元国語科教員及び学習院大学教職課程元兼任講師の根岸弘が、教材研究に加わった。教材の元としたのは、2004年刊『読みがたり 岡山のむかし話』（岡山県小学校国語教育研究会編／日本標準）である。2016年から2018年にわたり根岸啓子が岡山大学教養教育「能楽入門」で実際に使用した、岡山の民話に基づいた能・狂言の創作劇の台本の一部を、本稿の末尾に掲載しておいた。なお、演目名には識別しやすくするために〈 〉、創作能・創作狂言には《 》を付したことを記す。この試みは、学校教育における能楽の新たな授業方法を提言するものと考えている。

Keywords：能楽（能・狂言）、身体表現、コミュニケーション、創作劇台本

第一章 能楽へのアプローチ

能楽（能・狂言）は、我が国が世界にほこる伝統的な総合舞台芸能である。

2001年、ユネスコの第1回「人類の口承及び無形遺産の傑作の宣言（傑作宣言）」に、日本を代表してまっさきに登録された。能楽発祥からすでに600年以上たった現在まで、親から子へ、師から弟子へと、口承により伝えられてきたことが高く評価されたのである。幼少から芸の基本をまなび、年齢や芸の能力に応じ、たゆむことなく舞台の経験をつみあげた能楽師による舞台は、芸の花を追求し活躍した天才、世阿弥のいた室町時代にまでさかのぼれ

るといえよう。

そうしたすぐれた能楽も、じっさいは全国的にみて能舞台の数は少なく、演能の機会も限られていて、気軽に接することはできない。鑑賞はもっぱら、テレビ番組の放送や他の映像（DVD）や音源（CD）をとおしてというのが現実である。

しかし能楽は、目と耳で鑑賞するだけでは理解は深まらない。

そこで、平成28・29・30の3年度にわたり岡山大学教養教育科目実践知・感性（芸術知）夏季集中講義「能楽入門」において実験的な授業を試みた。受講希望者は、平成28年度、29年度、30年度で平均すると、各年度およそ60名の登録があった。

岡山大学大学院教育学研究科 芸術教育学系 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

*岡山大学 基幹教育センター（非常勤講師） 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

**学習院女子中・高等科（平成22年まで）／学習院大学 162-8656 東京都新宿区戸山3-20-1 / 171-8588 東京都豊島区目白1-5-1

Learning Noh and Kyogen based on Okayama's Folk Tales.

Hiroko YAMAMOTO, Keiko NEGISHI*, and Hiroshi NEGISHI**

Division of Art Education, Graduate School of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

*Center For Liberal Arts and Language Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530

**Gakushuin Girl's Junior and Senior High School. / Teacher-training Course at Gakushuin University. 3-20-1 Toyama, Shinjuku-ku, Tokyo 162-8656 / 1-5-1 Mejiro, Toshima-ku, Tokyo 171-8588.

しきいの高さから、とかく専門的、断片的な座学式理解でおわってしまうことが多い能楽を、発祥の原点までさかのぼって、総合的かつ創造的にたのしみながら実感してもらうことにしたのである。

受講生に事前に配布した資料に、世阿弥の以下のことばを引いておいた。

『風姿花伝第六花修』に云はく、

一、能の本を書く事、この道の命なり。極めたる才学の力なけれども、ただ工みによりて、よき能にはなるもの也。(中略) しかれば、よき能と申すは、本説正しく、珍しき風体にて、詰め所ありて、懸かり幽玄ならんを、第一とすべし。煩らはしくもなく、直ぐ下りたるが、面白き所あらんを、第二とすべし。これは、大凡の定めなり。

芸能は、ひとびとが興味をもつ内容でなければ、共感は得られず、とうぜん興行成果もあがらない。

世阿弥が完成させたといわれる申楽(当時の呼称、猿楽とも。いまの能楽に同じ)一座の芸能も同様であった。農耕儀礼に淵源をもつ田楽もさかんであった同時代、周囲のライバルにうち勝たない限り、一座は衰微、滅亡する運命にあったのである。それが今日まで生き延びてきたのは、たえず時代の求めにこたえるための先人たちの懸命の努力があったからである。現代は、シテ方五流をはじめワキ方・囃子方および狂言各流にわかれていて、能楽の全体像をつかむことは容易なことではない。

創作能・狂言を演ずるためには、まず本物を教える必要がある。導入は以下のような手順で行った。

第二章 能楽の全体像をつかみ、能・狂言の相違を見る

1. 公益法人能楽協会の許可を得て、教科書として『学んでみよう 能・狂言』を無料配布した。自習用として学生の手許に置き、たえず参考資料として見られるようにした。能楽の概略や能舞台図が記されている。あくまでも自習用であり、授業でいちいち教えることはしない。
2. DVD『能「囃子の世界」』(公益社団法人能楽協会)鑑賞。能舞台・楽器紹介・掛け声の仕組みなどが解説され、〈翁〉〈半蔀〉〈中之舞〉〈波頭〉〈祈〉〈獅子〉を部分収録された形で鑑賞する(24分)。同協会より授業での使用許可を得た。ほかにも、能の名作と言われる演目〈藤戸〉〈猩々〉〈高砂〉〈土蜘蛛〉〈道成寺〉〈松風〉などを鑑賞した。岡山県

倉敷市藤戸を題材とした名曲〈藤戸〉の鑑賞は、受講生へのインパクトを与えるように配慮した結果である。

第三章 能楽の基本の実技を学ぶ

a 能楽の音楽を体験する

発声：詞章を声にしてみる。まずは、おうむ返し方式で一節ごと繰り返しながら練習してゆく。「神歌」から抜粋。神歌は、特別な神聖な曲で限られた役者しか謡うことはできないのだが、内容を知るために声に出して謡ってみる。神歌は古い祝言の曲で「能にして能にあらず」といわれ、現代でも特別大事な曲として扱われている。節附けが難解で謡えない曲である。「祝言」の内容を把握する意味で一節ごと晴れがましさを意識して音読してみる。呪文のような不思議な謡を体験する。つぎに、謡・仕舞の入門曲〈老松〉キリをおうむ返しで練習し、全員で謡う。こちらは、簡単な節廻しであるので、謡を横書きの旋律線で謡うことができる。

リズム：平ノリ・中ノリ・大ノリという謡のリズムの違いを、〈鞍馬天狗〉から抜粋し謡う。

囃子：笛・小鼓・大鼓・太鼓の楽器紹介と各楽器の唱歌および手組で〈中ノ舞〉掛かりの部分声を声と両手を使いながら全員で合唱する。楽器が手元になくても笛の唱歌をうたう事ができ、多人数で学習できる。打楽器である小鼓・大鼓・太鼓の簡単な手組を学ぶことで、四拍子といわれる笛・小鼓・大鼓・太鼓の音楽的な仕組みを体験できる。能の音楽の特色でもある掛け声が生み出す「間(ま)」の世界を体感できる。

足袋と扇：シラバスに白足袋または代用のソックスと扇を各自用意するように記したが、能舞台には通常白足袋で上がり、扇は決まりとして常に携帯する。扇には演目内容に即していくつか種類がある。扇の機能としてさまざまな型をとおして情景を描写できることを説明する。創作能・狂言の演じ方の折に扇のX使い方を適宜にアドバイスする。

身体：構え(立ち姿)・運び(すり足)・下二居(座り方)の名称を説明し、ホール舞台で実際に動いてみる。

b. 能舞台に見立てる

舞台：ホールの舞台と能舞台の違いを確認したうえで、ホール舞台の中へ能舞台を作る。

まず能舞台の要所となるシテ柱・目付柱・ワキ柱の位置に箱を置き、中央の舞台を決める。舞台

から揚げ幕へ出入する「橋懸かり」という道筋を目に見えるように養生テープで区切る。このようにすることで能舞台に見える形に見立て作ることができる。最小の印で能舞台を作ることを学ぶ。
 作り物・小道具の作成：写真集や映像を参考にしながら、それぞれの題材にふさわしい作り物や小道具を創作する。画用紙・はさみ・布・紐等を用意。
 装束：新たに作る時間的余裕がないため身近にある布地や民族衣装などでも代用できる。身を飾ることで演じる方も「らしい」演じ方になり、役になりきりやすくなる。観る方も想像力がふくらむ。

c. 能面・狂言面の本面を展示

平成28年度は、能面制作の大型本をまわしたが、29・30年度は本面を展示することができた。能面制作者の理解を得て六面（「翁」「黒式尉」「小面」「蛇」「般若」「般若 制作途中の面」）を拝借してきたものを、現物教材として提示した。

受講生は、面を間近に観察することができただけでなく、じっさい「面をかけ」てどの位の視覚で動けるか確認できた。貴重な体験となっただけではなく、みずから演ずる創作能で、略式の「面」を制作するときの参考にもなったはずである。

第四章 能・狂言に基づく創作劇の舞台化まで

以上、能楽一般の基礎知識および基礎技能を身につけてきた。

ここからは『読みがたり 岡山のむかし話』（岡山県小学校国語教育研究会編／日本標準）を本説すなわち脚本の原材料に、細部にこだわらずに能楽の祖型をまなび、「能楽入門」へとつながる授業にはいる。

1. 『読みがたり 岡山のむかし話』から創作した能6話、狂言1話の各演目を、ホールの舞台で実践的に上演し、競い合うことを目標に掲げた。

『岡山のむかし話』編集委員会は、その編集後記に「集められた話は、内容や語り口を慎重に検討し、教育上の観点から選びを選んで再話した。再話にあたっては、方言の語り口を生かし、岡山のにおいをだいにした」(p.206)と記している。ここ岡山で興行を成功にみちびく大事なものがつまった本説なのである。

原話を、創作能・狂言の直前に朗読することで、岡山を郷土とするむかし話がどのように能・狂言に仕立てられているのかが理解できる。狂言はともかく、現行の能の詞章は現代日本人にとっては難解で、能楽を敬遠する理由のひとつともなっているといわれている。

2. ここからは短期間ながら事前に学んできたことをもとに、受講生みずから声を出し、謡を謡い、せりふを語り、舞台上で演じることになる。みずから身体を通し体験することで、能楽への興味と理解をよりいっそう深めるためである。

教養教育科目ということもあって受講生はほとんど全学部にわたり、抽選によって履修人数に制限を設けることになった。想定をこえる反応に、能楽にたいする教養をもとめる学生の多いことを知り、あらためて開講の意義を感じることができた。また全期間、シャトルペーパーをとおして意思の疎通をはかった。自由に書かれた紙面からは知的な関心をもって、意欲的に取り組む受講生の豊かな感性が伝わってきた。

3. 授業開始とともに、受講生は創作能・創作狂言を上演するため、それぞれの一座を作ることから始める。

グループ分けの方法としては、さまざまなアイデアが出やすいように、学部・男女が偏らないようにシャッフルし、平成26年度は七座、27・28年度はともに六座、を結成することができた。

つぎに、各座の座名を話し合いにより決める。座名は一座団結のシンボルである。それから、座頭であるリーダーとなるシテを選出か立候補で決める。また興行をおこなう演目作品の選択が不公平にならないように、「あみだくじ」や「じゃんけん」により作品と興行権を決定してゆく。

最後に、受講生は各座にわかれ、全員で作品の解釈を深めてから、それぞれの役柄と舞台づくりの分担を決める。

一座はリーダーを中心に結束し、相互にコミュニケーションをとりながら、世阿弥のいう能の本すなわち台本の舞台化をすすめる。ここからが実践知と感性（芸術知）を涵養する絶好の機会となる。

第五章 表現体験の成果

事前学習をすませた受講者がじっさいどのようにして舞台化し、能楽入門体験をしたか、指導にあたった者としてその成果を分析し、まとめとしたい。

1. 教育学部北音楽棟3階多目的ホールに、各座は分散して上演にむけた準備をはじめた。

仕切りのない広い空間なので互いの動きは手に取るように見える。演目がことなるので単純に比較することはできないが、つくり物や装束のちがいが、進行状況はそれとなくわかる。こうした環境はまさに切磋琢磨にふさわしい場となったらしく、各座は真剣になって取り組んでいた。不明や

心配な点があるとアドバイスを求めにくる。いい加減な理解では人前で失敗するおそれがあり、必然的な行動である。

2. この岡山の民話に基づいた能・狂言形式の劇は、略式ながら現行の能・狂言と同じつくりになっている。詞章は、七五調をもとに書かれているので、とうぜん節をつけて謡うことができる。能楽はもと猿楽とよばれていた。ものまね・型を中心とする芸能であったからである。型にはまらなければ、舞台の見映えはそこなわれる。能・狂言のうまい・へたは、その型の習得具合によって決まるといってよい。

3. 型の基本中の基本は、事前学習で指導した構え（立ち姿）・運び（すり足）・下二居（座り方）。これが身についているだけで、にわか出演者の舞台であっても、いちおう能・狂言らしくなるから不思議なもので、じっさいの上演で本物の能管の音が加わるとなおさら雰囲気が高まる。

4. 上演を前にして印象に残った学生たち

▼「すり足」：しっかり身につけていた弓道部の学生がいた。

型から入る点で共通するものがあつたと思われる。能は動く彫刻ともいわれている。身体の軸が動くとき身体全体の調和がうしなわれてしまう。呼吸を整え水の上をすべるように移動することが大切である。受講生は、映像で見た能役者の動きをものまねして舞台の人となる。幕を出て橋懸かりまでの足の運びで出演者の力量がわかるということを、出演者全員が身をもって知るよい機会となったにちがいない。

▼「狐面」：はさみで立体的につくった職人肌の学生がいた。

能は仮面劇である。能面のなかでも「翁面」は人格化され、特別な扱いをうけている。能面がいかに重要であるかを知ることができよう。創作能《備中狐》で後シテがつける「狐面」の出来は舞台の出来を左右するほどのものである。一座にすぐれた面打ちがいることは競い合いに勝つための条件である。

▼「藁屋」：作り物を布とひもを使い手動開閉させる工夫をした学生がいた。

舞台の進行を陰でささえる後見役がある。少ない人数でまかなう関係で、演者と後見の二役をつとめなければならない場面で、創作能《五百比丘尼》の手動開閉方式「藁屋」は創意工夫の産物であった。

▼「暗誦」：短期間で暗誦をすませた演劇・ミュージカル経験ありの学生がいた。

今回の上演にさいしては暗誦を義務づけることはしなかった。しかし積極的な学生は早々と暗誦して周囲に刺激をあたえた。好きこそ物の上手なれを地でゆく活動は、他座にも好影響をおよぼしていた。

▼「能管」：落語研究会の出囃子で能管を吹いている学生がいた。

能管や篠笛の愛好者は古来の芸能に参加することを楽しむ。能管の演奏方法の指導をたのまれた。

▼「吟詠」：詩吟を始め、吟舞をやり始めている学生がいた。

能の謡や仕舞に興味をもち、謡曲と詩吟と比較する質問をしてきた。能楽を学ぶ姿勢が好ましかった。

▼「装束」：民族衣装を着て恍惚としている男子学生がいた。

山本研究室所蔵の民族衣装を活用することになったが、役にふさわしい衣装を見つけ悦に入っていた。

▼「狂言」：「やるまいぞ やるまいぞ」と狂言すり足をする学生たちがいた。

狂言は日常生活のちょっとした出来事を大袈裟に表現しておかしみを出す。《芋ころがし》最終場面で「やるまいぞ やるまいぞ」と連続してせりふを発しながら序破急のテンポをつけて攻め込んでゆく場面がある。扇を右手に持ち上座の者を指しながら一同の者たちが勢いをつけて追い込んでいくときの型を全員で練習しようとなった時に、皆笑って恥ずかしくて出来なかった。そこで受講生たちに身近なことを思い描いてみるのが大事と提案した。ちょうど順番にあたった学生が、「冷蔵庫の中のお姉さんのプリンを黙って食べてしまった。お姉さんが帰ってきて食べようと開けたらプリンがなかった。誰が食べたの?」。そこで「ではそんな場面をイメージして追い込んで下さい」と助言をした。状況が明確になり、はっきりと発音できて、すり足も上手になった。

5. 各演目のエピソード抜粋

創作能《穀の精》

平成30年度の受講生の上演形態がじつに独創的な発想で面白かった。朗読と能とを切り離して上演するものと思っていたところ、能の中に朗読を組みこませてきた。能の時よりも筋がわかりやすく良かったのである。上演するときの座の人数が減って苦肉の策であったかも知れないのだが、朗読者と地謡を一人で演じた。本番のお楽しみに隠し球を用意して見所を驚かせたのである。「秘すれば花」「珍しきが花」という世阿弥の心を一座がよく理解できて

いたからこそその結果である。

創作能《狒々》

シテは狒々。シテの語りが無い唯一の作品となった。但し、他の能と異なり、ワキのさむらいと狒々とが斬り組む場面があり、演じていても観てもわくわくする場である。扇を刀に見立て、両者が迫真の演技をする場面で笛も必死に囃す。しかしながら当のシテは奇声を発するだけでせりふがない。「せりふが言いたかった」と最後にぼつんと一言感想を言われた。

創作狂言《芋ころがし》

一番やりやすいのがこの狂言である。担当する座はもちろんのこと楽しそうに演じきっていた。他座の受講生のシャトルペーパーでもやってみたかったという感想が多かった。

第六章 学習成果発表会

2016年夏季集中講義の成果発表会として「山本宏子企画『やってみました 不思議な世界』(会場：岡山大学教育学部北音楽棟3階多目的ホール)を開催した。2016年8月3日、教員免許状更新講習に参加した多数の先生方の前で、急遽「アフリカ文化入門」履修者とのコラボレーションで発表会が行われた。

「アフリカ文化入門」からは、ギニアの太鼓ジェンベとダンス〈マクル〉が披露された。灼熱アフリカ大陸の激しい太鼓のリズムは、人類の持っている原初のエネルギーを感じさせた。勢いよく高く飛び跳ねて、人と人との入れ替わるダンスには生きる喜びを感じさせるものがあつた。受講生がたった三日間で覚え、実演したことは驚くべきことであつた。

「能楽入門」からは、リハーサル・本番をおえた時点で受講生全員の挙手による投票で選ばれた演目、創作能《薪姫》《狒々》および創作狂言《芋ころがし》の3番が上演された。アジアの東に位置し、長い歳月をへて守られてきた我が国の能は、「面」をかけ「すり足」で演じられる。演劇性ゆたかな能とは異なり、集団で演じて開放的な笑いをさそつた狂言。対照的な舞台表現となつた。〈芋ころがし〉一座は、本番出演前にデモンストレーションを演じた。初めて狂言に挑戦する他の受講生たちのために教える側に回つた。受講生全員が舞台に並んで、見よう見まね、「ものまね」そのもので演じきつた。

第七章 おわりに

この集中講義をとおして受講生に何がつたわり、何がつたわらなかつたは、シャトルペーパーによって知ることができる。30年度受講生のなかに、すでに別の能楽の授業を受けていた学生がいて、参考になる感想を述べていた。大意は「①上演本番をおえて達成感がある。②他座の創意工夫に刺激をうけた。③能楽のような伝統芸能の知識がないと、海外の人たちからの質問にたいし答に窮する。④将来、小学校の教員になり、今回のような創作劇を学校現場で実践してみたい」というものであつた。

能楽師の多くは字も読めない幼少のときから親の厳しい指導をうける。600年以上の歴史がつまつた芸能で、「人類の口承及び無形遺産の傑作」といわれるゆえんである。

能楽はたしかに一般のひとびとにとっては近づき難い存在である。しかしながら岡山の民話に基づいた創作能・創作狂言ともなれば、話はまた別である。げんに本説である民話の朗読をとおしてストーリーを頭に入れたあとの台本は、たとえ難しい詞章であつてもほぼ完全に理解できている。さらに必要な型を学んだうえで、作り物を作製し、装束を決め、一座で一致協力して舞台化する。

若く柔軟性のある頭脳をもつた受講生にとって、高いハードルはかえつて知的身体的刺激をあたえる結果になつたともいえる。シャッフルに運命をゆだねて、即席で結成された、ひと夏だけの一座という設定も、まさに夢幻能の世界のようである。

難解な詞章・伝統的な型と様式など、超えるべき壁は高いが、その壁にいとむことによって、さまざまな表情をもつ日本文化の地層が見えてくる。

さいごに、『岡山のむかし話』から創作能・創作狂言の脚本を作成することをご許可いただいた岡山県小学校国語教育研究会、冊子『学んでみよう 能・狂言』を多数ご提供していただき、またDVD使用をご許可をいただいた公益法人能楽協会に心からの御礼を申し上げます。

引用文献・参考文献一覧

岡山県小学校国語教育研究会編

2004 『読みがたり 岡山のむかし話』

東京：日本標準

見たこともないで、ござる。
 わしらも見たこともないで、ござるで、ござる。
 まず、しずしずと漆の箸を持ち、
 漆のお椀のふたをとったれば、
 中の汁をばそつと飲む。
 つぎは三種の前菜、
 どれもこれも、結構なお味（チツと舌をならす）。
 まつこと、めでたい、鯛もある。
 さてこれは好物、芋のところがし。
 見ればお行儀の方、勢いあまって前へコロリ、
 一同右へなえと、たたみの上へコロリコロコロ。
 はさめぬ芋を、箸でブツツリ。
 槍のごとく狙いさだめて、
 ブツリブツリ（たたみの上でつつき始める）。
 これはいかな。変なまねをしないと、ござる。わしもちったあ。
 気をつけにやいかんと、からだもピリピリ。
 カッチリカチカチ。思わず、
 右のひじが、隣の客にゴツンコ。
 これも何かのお行儀で、ござるか。
 それとばかりに、隣の客にゴツンコ。隣の客は隣の客に、ゴツゴツ
 ゴツンコ。
 わしにはゴツンコの隣がおらんぞな。もうし、もうし、お行儀の方。
 こりゃいかん。箸にも棒にもひっかからぬ山猿め。
 ひとまず退席すると致そう。
 やるまいぞやるまいぞ、やるまいぞやるまいぞ、やるまいぞ。

■能の一座をひきいる大夫にはライバルに打ち勝つてゆくためのあらゆる工夫、努力が求められる。

■台本づくりの基本的な約束ごとの確認

- ① 本説（典拠）正しい岡山の民話に材をとる。
- ② 能の詞章は文語体で、会話は「候」でおわる。
- ③ 狂言の詞章は口語体で、会話は「ござる」でおわる。

■吉備新見の民話に基づく『穀の精』

シテ（作り物より出で）

満奇（まき）の洞

地謡 千疊敷の蠟（らふ）の火の、あかりに見たる顔を
 わすれじ。

は、近代の歌人と謝野晶子の歌を、そのまま取り入れている。
 満奇の洞は鍾乳洞で、新見市の観光名所となっている。

■備中奈義の民話に基づく『五百比丘尼』

シテ さればこそ、世を逃れ、山に隠れて、幾百年。

ワキ しからば、そなたの娘の比（ころ）は、

シテ かしくも後醍醐天皇、隠岐に御流されし頃、
 は、いまでも岡山各地に残る後醍醐天皇伝説を語っている。

□岡山の民話「桃太郎」は全国的に有名であるが、『読みがたり 岡山のむかし話』におさめられた豊かな民の語りも、大切にすることを願っている。

参考文献

『読みがたり 岡山のむかし話』

岡山県小学校国語教育研究会編 東京…日本標準 二〇〇四年

シテ (正中にて下居)
ワキ (常座にて名乗)
菊は 水に臨むに依りて浅き黄を凝らす。
是は、越中より出でたる、葉売りにて候。
菊水は、長寿の薬よと、商ふうちに、道に迷ひて候。
やッ、谷川に、洗濯する女人の、御座候。
早速、道を尋ねばやと、存じ候。
シテ (立ちワキと対面)
旅の方、おん尋ねの先は気の毒ながら、余りに離れて候。
あれに見ゆるは、伊弉諾(いざなぎ)の、那岐の山。ここは山 深く
して日のあるうちに、越ゆること、なかなか叶ふまじく、候べし。さ
れば、柚の家にも劣る、我が家なれど、草の枕には、まさらん。
(藁屋の幕開く)
誘はれて、一夜を明かす賤(しづ)が宿 一夜を明かす賤が宿。
地謡 女性(によしょう)の年は、二十七八、
腕に盛る、粟の粥こそ、有難き。
シテ 率爾(そつじ)ながら、身の上とも、昔話とも、聞こし召せ。
地謡 わらはは、お遍路の行き交ふ四国にて、漁師の家に生まれ、
シテ 漁師に嫁ぎ、多くの子をなせど、ある年、思いもかけぬ大病。
地謡 折しも沖に出て、夫の採(と)りし、不思議の貝を
シテ 食せばたちまち、治る喜び。
地謡 さりながらその後(のち)、年は二十七八、いつまでも、変はること
シテ なし。
地謡 夫 子供、世に失せても、変はることなき 年の頃。
シテ はては 化け物と、呼ばるる悲しさに、土地移りても、また求められ、
地謡 四たび五たび、繰り返す、この世の夫婦の仲の、うとましさ。
シテ さればこそ、世を逃れ、山に隠れて、幾百年。
ワキ しからば、そなたの、娘の比(ころ)は、
シテ かしこくも後醍醐天皇、隠岐に御(おん)流されし頃、
地謡 ばツと変はる顔色、百薬の、長と銘(めい)打つ薬も愚か、息絶え絶
シテ えの、葉売り、腰菱(な)えて、ただ手を合はす、ばかりなりけり。
シテ もとより五百より千に近き我がよはひ、死にもせず。
(橋掛りより幕に入る)

地謡 いまだ二十七八の、妙齡(めうれい)を生くる定め、語るも聞くも
ワキ 不思議の物語。
地謡 暁暗(げうあん)に、道教へける女人は、五百比丘尼か。
ワキ (常座にて送る)
振り返れば、重畳(ぢゆうでう)の山、霧中に浮かび、一夜(いちや)
過(えう)せしかの山は 見えずなりけり。
沓(えう)として、見えずなりけり。
[7] 狂言「芋ころがし」(「イモころがし」)
シテ 山奥の者 狂言 季 不明
アド 上座の者 所 岡山のとある山奥
アド 一同の者(複数)
(正中にて全員、宴席よろしく横並び、下手にシテ、上手に上座の者
着座)
山奥 これは山奥の者で、ござる。
一同 同様の者で、ござる。
山奥 今日(こんにつた)は、村の分限者(ぶげんしゃ)の嫁取りの晴れの
お席に呼ばれた。めでたい事じゃ。
一同 村中の者が呼ばれた。わしらも呼ばれた。まっことめでたい事じゃ。
山奥 それにつけて、ちと心配事がござる。わしらは生まれてそのまんまの
山育ちにて、お行儀もなんも、一向に存ぜぬで、ござる。
一同 一向に存ぜぬで、ござる。
山奥 じゃが上座(かみぎ)には、お行儀をよう知つとる方を頼うでおいだ。
上座 お願ひ致しまする。
山奥 温故知新。お任せあれ。
一同 万事は右へならえ。これでわれら、
山奥 一同安心じゃ。いよいよ待ちに待ったお酒盛り。
山奥 おお、これが御家紋入りの本膳で、ござるか。わしは生まれてこの方

ワキ お寺の屋根瓦、その下にある守り札、取って与へ候。
後シテ それさへあれば、われはもとより 備中一の 古ギツネにて 候へば。

地謡 お礼とて、和尚の眼前まぼろしの、釈迦の行列、あらはしにけり。
ワキ 和尚おもはず合掌し、
地謡 空上ぐれば一匹の 空上ぐれば一匹の。空飛ぶキツネ、
空の向こうに、小さく なりにけり。
ぼつんと小さく、なりにけり。

③ 「穀の精」 「穀の精」

ワキ 旅僧 四番目物 季 秋
シテ おかか 所 吉備新見
アイ 米の精・麦の精・アワの精

大小前に唐紙屋敷の作り物（中にシテ）

ワキ （常座にて名乗）

是は、諸国一見の、僧にて候。吉備路遙かに 旅寝を重ね、
漸う、名も慕はしき、新見の里に、着きにけり 新見の里に、つきに
けり。

あら 笑止や。天、俄にかき曇り、雨風、頻りなりければ、これなる
無人の屋敷に、宿を借らばやと、存じ候。（正中にて下居）

地謡

一鉢に、霞吹き込む、乞食の道。

一粒は、丹精こめたる、百姓の汗涙（あせなんだ）。

一鉢一粒、露命を繋ぐ、修行の身の。
今宵また、悟りに至る、一夜の宿。

アイ

（作り物の右より） おかか おるか。

シテ

（作り物の中より） おかか おるぞ。

アイ

どおれ、米の精（正中に下居）

アイ

（作り物の左より） おかか おるか。

シテ （作り物の中より） おかか おるぞ。
アイ どおれ、麦の精（正中に下居）
アイ （作り物の前より） おかか おるか。
シテ （作り物の中より） おかか おるぞ。
アイ どおれ、粟の精（正中に下居）

地謡 餓鬼乗せて、寄せ来る火車（くわしや）の 轍（わだち）の音、
降り来る亡者、恨みは、深し。
シテ （作り物より出で）
満奇（まき）の洞

地謡 千畳敷の、蠟（らふ）の火の、あかりに見たる 顔をわすれじ。
アイ （一同、シテを囲みて）

地謡 飽食の世の習ひ、百姓の報ひは薄く、
万（よろづ）の蔵に、朽ち果つる、
アイ 声なき 我ら。

シテ おかかを慕ふ 穀類の、
地謡 夜ごと集まる、火宅に轟く、轍の音、山深き、新見の 里、
シテ 一粒ならぬ、億千万劫（おくせんまんごう）の
アイ 眷属（けんぞく）を、救ひ給へ。

ワキ 南無や大悲 観世音。
地謡 御僧祈れば、暁の、鳥の声。五穀の 憂ひ、一筋の、
煙（けぶり）となつて

空に消ゆるぞ、はかなかり。
空に消ゆるぞ、はかなかりける。

⑤ 「五百比丘尼」 「五百びくに」

ワキ 葉屋 鬘物 季 夏
シテ 女 所 備中奈義

（大小前に鬘屋の作り物）

『読みがたり 岡山のむかし話／岡山県小学校国語教育研究会編』（日本標準刊）による

岡山創作楽劇脚本集（能・狂言仕立） 作 根岸 弘・演出 根岸啓子

□能仕立

備中

① 備中狐（空を飛ぶキツネ）三四～四〇頁）

岡山

② 薪姫（「タニシのむこどの」七三～七七頁）

吉備新見

③ 穀の精（「穀の精」九七～一〇二頁）

吉備国久米

④ 狒々（「ヒヒ退治」一二六～一二二頁）

備中奈義

⑤ 五百比丘尼（「五百びくに」一四五～一四九頁）

備中神郷

⑥ 猫檀家（「ネコだんか」一五五～一六一頁）

□狂言仕立

備前山奥

⑦ 芋ころがし（「イモころがし」一七三～一七五頁）

紙面の都合から①・③・⑤・⑦の作品を取り上げることにする。

① 「備中狐」（空を飛ぶキツネ）

ワキ おしょう

前シテ 小僧

後シテ キツネ

四番目物 季 春

所 備中

ワキ

（常座にて名乗）

是は備中某寺の、住持にて候。

檀家の信心 深きにより、

寺の勤め、なにかと多忙に候ひしが、

この程、働き者の小僧、暇申し出でたれば、

親元へ歸し候。

地謡

朝夕に、

閑伽の水には花の香 閑伽の水には花の香

ひとりたやさぬ勤め 尊し。（脇座にて下居）

前シテ

（二ノ松にて）

我はこのあたりに住む、キツネにて候。

近頃、某寺の小僧、暇乞ひしければ、

御坊一人、困窮したるとの、風聞あり。

この夕べ、早速変化して、

門を、叩いてみばやと、存じ候。

前シテ

（正中にて）

申し申し。

ワキ

（ワキ立ち、シテと対面）

日も暮れかかる この夕べ、何者にて候ぞ。

みなしごにて候へば、和尚の情けにすがらんと

ことはりもなく、参り候。

ワキ

南無、千手観音のお導き。

折もよし。早速ながら、炊飯清掃の役を、頼み申し候。

前シテ

畏まつて候。

地謡

げに怪しきは、狐狸の業 げに怪しきは、狐狸の業。

ふりかへり、尾を振れば、たちまち曇る 人間の

眼の曇り晴れやらす 眼の曇り晴れやらす。

（中人）

地謡

正体ばれしは、台所。今はこれまでと、

暇を乞へば、和尚は許して、望みのままに、